福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月及び星・虹を愛でながら】」から

主宰論説24

異分野の融合

最近、学術と工学の融合、理科と文科の融合、科学と芸術の融合、伝統文化と先端技術の融合、映像と音の融合など、色々な形の融合の重要性が喧伝されているようである。かねてから、学術の専門分野で薫陶を重ねて重きを得ること、芸術の分野で一芸に通じ、名人芸に達することが、尊いとされ、また、ある産業分野で栄達を遂げるとともに、蓄積した財をもとに社会的貢献をすることが、人の生きる道として推奨されてきたようだ。ところが、最近では、異業種交流が盛んであるとともに、これまで独立的に、無関係に発達してきた異分野での融合が喧伝されることが多い。日本建築学会でも、持続可能な発展目標（SDGs）への対応を考え、今後の建築の在り方として、科学・技術・芸術の融合が必要であると述べている。学術と工学の融合は、これまでもその必要性が説かれてきたし、理科と文化の融合も論じる人も多かったようだ。だが、昨今の不透明な想定外のことが余りにも多い中で、夢と希望と光の見える将来・未来を展望する上で、改めて、異分野の融合について、その必要性が重要視されている。科学と芸術の融合も、盛んに説かれるようである。異分野の知識や考え方が、非常に参考になるということのようである。だが、科学にも、自然科学だけでなく、人文科学や社会科学もあるし、人文科学の中にも、文学、歴史、地理などもあるし、社会科学にも、法学、経済、政治学などもある。他方、一口に芸術といっても、建築、絵画、彫刻など、造形美に関するアポロン的な芸術もあるし、音楽など、陶酔美に関するディオニソス的な芸術もある。踊り、能・狂言、歌舞伎のような、両者の中間的な芸術もある。このような多岐にわたる分野の融合は、人間の文化・文明そのものに関わるから、そう簡単でもなく、単純でもないと考えられる。ただ、前にも少し述べたように、芸術的感受性が、自然科学および工学における新しい着想や閃きを生むこともあるようだ。色々な発明・発見の逸話でも知られている。最近では、先端技術と芸術の融合として、単なる模倣でなく、超越に近いクローン文化財というものがあり、３Dプリンターなどの最先端ディジタル技術と伝統的な手技・素材技術との融合で、喪失した名画、名彫刻などを鮮やかに蘇らせ、復刻させる話もあるようである。東京芸術大学のチームが、シルクロードの影響のある天平時代の東大寺法華堂の極彩色の執金剛神立像を復刻させ、東大寺に寄贈したという（毎日新聞：2021年５月１日）。文化財や世界遺産を後世の子孫に伝え、継承するのに大いに役立つと考えられる。いずれにせよ、垣根を超えた自由な考え方と技術が、今後の夢と希望と光の未来を切り開く力と源にもなることを期待したい気がする。

令和３年５月４日

自由短歌：

異分野も融合すれば新分野名前はどうする痛み分け

二刀流とトロイカ

　最近、とある野球選手の投打における二刀流の活躍に、拍手喝采の動きが盛んである。もともと二刀流という言葉は、剣聖宮本武蔵の二天一流に由来するようである。柳生流や千葉周作の北辰一刀流のように、長剣一刀を基に、剣の奥義を極める流れが主流である中で、敢えて、長剣と短剣を組み合わせた二刀流を編み出し、別の形で、剣の道を貫いたことに対する称賛の念も強かったと言われている。だが、今度の野球選手の快挙に対しては、投手、野手どちらかに徹しないと大成しないという批判もあるようである。先人のアメリカの野球選手も、最初の二刀流から、野手に専念し、ホームランバッターとして大成したといういきさつもあるようである。ただ、二刀流を貫いて、これまで誰もなしえなかったことに挑戦する姿は、別の意味で、感動をもたらし、夢と希望を与える源になると思われ、応援したい気持ちになる。ただ、技術的な精進とともに、怪我とか不慮の病気で挫折することのないように、健康には留意してもらいたいものである。分野は違っても、研究者も、負けずに、トロイカの３頭馬車方式で、研究発表を続けてみたいものである。年寄りの冷や水といわれるかもしれないが、命の続く限り、体が動く限り、頭の働く限り、継続したいものである。

令和３年５月４日

自由俳句：虹の橋孤剣破れず花あざみ